

月刊

2020

5
月号

みんぱく

特集

釣り

釣り人と人、魚 秋道智彌

沖縄のカツオ一本釣漁と餌の獲得 吉村健司

街場の釣り堀、この小粋なるもの 木名瀬高嗣

溪流の魚と人 榎永真佐夫

中国における釣りの歴史 塚田誠之

大平原の釣り

二〇年ほど前、モンゴルを初めて旅した時のことだ。大草原の中を静かに川が流れていて、カヌーの上からルアーを投げると三〇〜五〇センチの魚がよく釣れた。レノックと現地地と呼ばれているサケ科の魚だ。初めて訪ねる国で魚を釣る時は、なんとなく期待で胸が躍る。日本のフナ釣りのような仕掛けを投げると入れ食いになり、ぼくはすぐに飽きた。川は澄んでおり、釣れた魚は臭くなく、焼くだけで食べることができた。

モンゴルの国旗には魚の図柄が描いてある。モンゴルでは魚は神の使いであって、人々は魚を食べる習慣がない。地元の人たちがやってきて、釣りをするぼくを珍しそうに眺めている。竿を貸してやると、ルアーで簡単にかかると驚いていた。ここには釣りという遊びがまだないようである。

川の畔にテントを張り、一日釣りをした。日が暮れると、川の浅瀬にタイメンが出てくる。八〇センチ前後のタイメンを釣った。大きいだけでニジマスのような美しさはない。ぼくとしては、二〇センチ前後のハヤに似た魚をたくさん釣ったのが面白かった。

翌朝テントを出ると、一人の男が馬に乗り、野生の馬の群れを追っていた。モンゴルの遊牧民は竹

野田知佑

プロフィール
1938年生まれ、熊本県出身。カヌーイスト、作家。国内外の川をカヌーで旅し、川と人の暮らしの繋がりを伝え、環境破壊について警鐘を鳴らす。1982年、『日本の川を旅する』（日本交通公社出版事業局）で日本ノンフィクション賞新人賞受賞。徳島・吉野川で子どもたちに川遊びを教える「川の学校」校長を務めている。著書に、『ナイル川を下つてみないか（ヘイチユアエンタープライズ）他。

竿につけた縄の先を輪にし、それを投げて馬の首にかけて捕まえる。朝霧が立ちこめた平原を、幾つもの馬の影が駆けていった。

カヌーにキャンプ道具を積みこんで出発。

子供たちが馬に乗ってやってきた。ぼくがカヌーを漕ぎだすと、彼らも馬に乗ったまま川に入り、水音を立ててフネの横を駆けた。半日カヌーと並走し、子供たちは手を振って帰っていった。

草原の中に遊牧民のゲルがポツポツと見える。「サンバイノ（こんには）」と声を掛けると、家主が乳茶を入れたヤカンと茶碗を持ってきてもてなしてくれた。牛やヤクの乳に水と塩を加えて沸かし、茶葉を煮だしたものだ。乾燥した空気の中を漕いできたので、酸味と塩気のきいた温かい乳茶が身に染みた。言葉が通じないため、ただ顔を見合わせてニヤニヤするだけである。

夕方岸に立ち、ネズミ形のルアーを投げこみイトウを狙った。ぐいっと竿がしなるが、すぐに糸を切られてしまった。カナダ製のシャモジのようなルアーをつけて、再度竿を振る。大きなアタリがあり、ゆっくりと引き寄せた。九〇センチのイトウだ。タモ網で上げると魚が頭を二振りし、五号のラインがプツリと切れた。

月刊 みんなぱく

5月号目次

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 1 | エッセイ 千字文
大平原の釣り
野田 知佑 | 12 | みんなぱく Information |
| | 特集 釣り | 14 | 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界
鵜の運搬籠
卯田 宗平 |
| 2 | 釣り人と人、魚
秋道 智彌 | 16 | みんなぱく回遊
オンライン展示の条件
伊藤 敦規 |
| 4 | 沖縄のカツオ一本釣漁と餌の獲得
吉村 健司 | 18 | シネ倶楽部 M
グローバル経済と闘う女性たち
——「メイド・イン・バングラデシュ」
南出 和余 |
| 5 | 街場の釣り堀、この小粋なるもの
木名瀬 高嗣 | 20 | ことばの迷い道
「わたしこそ、ありがとう」
岡本 真理 |
| 7 | 溪流の魚と人
樫永 真佐夫 | 21 | 次号予告・編集後記 |
| 8 | 中国における釣りの歴史
塚田 誠之 | | |
| 10 | 〇〇してみました世界のフィールド
メキシコから広がる音楽と宴
増田 耕平 | | |

釣り

釣りとは、ずいぶん古くからおこなわれていた。沖繩のサキタリ洞（南城市）からは三万三〇〇〇年前の釣りばりが出土した。大きさは一・五センチメートルほどで、ニシキウズ科の貝を加工した単式釣りばり（単一素材を加工したもの）であり、世界最古の発見となった。



あきみちともや
秋道 智彌
民博 名誉教授

人はなぜ釣りをするのか？ 一本の糸をとおして魚（自然）と対峙するというこの行為は、食料調達や趣味の域にとどまらず、文学や山水画の世界にも描かれ続け、人生観や世界観を表現する手段となっているようだ。本特集では、人と魚をつなぐ「釣り」とは何なのかを考える。

人類最古の海の技術

釣りは、ずいぶん古くからおこなわれていた。沖繩のサキタリ洞（南城市）からは三万三〇〇〇年前の釣りばりが出土した。大きさは一・五センチメートルほどで、ニシキウズ科の貝を加工した単式釣りばり（単一素材を加工したもの）であり、世界最古の発見となった。



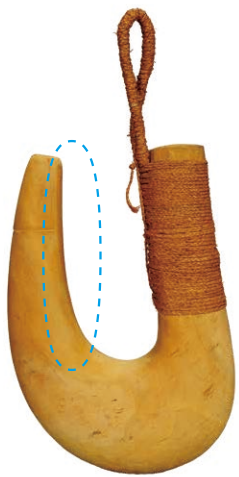
ジェリマライ遺跡出土のサラサバティラ（高瀬貝）製釣りばり（16,000～23,000年前）
Picture provided by Dr. Sue O'Connor (The Australian National University)

東ティモールのジェリマライ遺跡からも旧石器時代のサラサバティラ（高瀬貝）製釣りばりが発掘された。

随伴する魚骨から、外洋でカツオやマグロが釣られていたと推定されている。新石器時代になると、日本の縄文遺跡から大量の釣りばりが出土する。時代は下るが、ポリネシアでも釣りばりが数多く見つかる。土器を欠くポリネシアでは、釣りばりが考古学の編年における指標とされた。B・P・ビショップ博物館の故篠遠喜彦の業績である。

釣りばりの多様性と共通性

釣りばりの形は、旧石器時代から現代までほとんど変わっていない。その原型は旧石器時代に完成し、現代まで持続してきた。ただし、その材料は現代では金属やプラスチックであるが、以



サメ釣り用の木製釣りばり。破線の部分に魚の切り身をひもで固定して餌とする（ソロモン諸島ペロナ島、H0124847）

オセアニア地域に見られる釣りばりのなかで、最大のもはサメ釣り用の木製釣りばりで、長さ約三〇センチメートルにもなる。一センチメートル程度のは小型のメアジ用であるし、一〇センチメートル程度なら大型のマグロ、サワラをねらうためのものである。二五～三〇センチメートルのV字型木製釣りばりはルヴェタス・フックとよばれ、水深数百メートルにいるパラッツを釣る道具である。熱帯では、砂地に潜む大型のシャコを釣るのにあらかじめ準備したシャコの前鋏（まえはば）をシャコのいそ（いそ）うな穴に差し入れ、シャコをおびき出して釣りあ

げる。また、ポリネシアには、石に大型のタカラガイの貝殻片をつけ、海中で上下させてタコを釣る漁法がある。沖繩でもフデガイを擬餌（ぎじ）ばりとしてイイダコ（ウムズナー）を釣る。

釣りとは神話

ポリネシアでは、釣りの名人はタウ・タイとよばれる。タウ・タイの死後、埋葬場所を盗掘し、その人骨で魚を釣ると釣果があがると信じられていた。タウ・タイにはマナとよばれる超自然的な力があり、そのマナが魚を引き寄せると考えられていたわけだ。ハワイでは人骨製のペンダントを身につけると、超自然的な力を体得できると信じられてきた。魚が多く釣れるだけでなく、幸運を引き寄せ、家族が繁栄するとも考えられた。釣りばりは海上での安全のためにも重要で、フェティッシュ（呪物）の意味もあった。

ギルバート諸島では、若者が一人前の漁師になるための成人儀礼がおこなわれてきた。特に、外洋でのカツオ一本釣りに習熟することを願い、若



トビウオ釣り用のゴージと浮き（ソロモン諸島サンタ・アナ島、H0124948）

前は貝殻、石、骨、べつ甲が用いられた。木製の釣りばりも民族誌には多くの記載がある。

釣りばりの前身がゴージである。ゴージは木や骨を直線型かV字型に加工したもので、これに釣り糸を結ぶ。魚が食いつくと、ゴージが口内で回転して突き刺さる。東南アジア、オセアニアに分布する凧揚げ漁では、凧から垂らした糸先のゴージに餌としてココヤシの果肉をつけ、トビウオを釣る。ゴージなしにクモの巣を丸めたものやサメ皮を餌として、歯の鋭い大型のタツを釣ることもある。

者はカツオの生血を儀礼のなかで飲み、カツオ釣り漁のプロを目指した。

ハワイには「島釣り」伝説がある。半神半人のマウイが兄らと魚釣りに出かけ、大物を釣り、釣り糸を引きながら漕いでいると、島を釣りあげた。また、別の島を海底から釣りあげてハワイ諸島ができたとする壮大な神話もある。

日本にも海幸山幸の神話がある。弟（山幸彦）と兄（海幸彦）がある日、自分たちの漁具を交換したが、山幸彦が海で釣りばりを失う。失った釣りばりを探しに行った山幸彦は海底の国に至り、海神の娘と結婚し、その後、釣りばりとともに潮盈珠と潮乾珠を地上にもち帰り、海幸彦を懲らしたとする神話である。

オセアニアの考古・人類学者であるF・M・ラインマンは、釣りばりの技術史を（一）沿岸から沖合へ、（二）表層から深海へと変化するとしながら、古代神話の時代から釣りは深海にまで到達するものとされていた。旧石器時代にさかのぼる釣りとは人間のかかわりは、壮大なドラマの主役であったのだ。



メアジ釣り用の釣りばり。ソロモン諸島のツラギ島にある第二次世界大戦時の日本軍基地の沈船から金属をとり、溶かして鋳型で作ったもの。グワマラーとよばれる最小の釣りばり（ソロモン諸島マライタ島、1975年）



トロリングでサワラを釣りあげる（パプアニューギニア、マヌス州ロウ島沖、1991年）

沖繩のカツオ一本釣漁と 餌の獲得

吉村 健司

東京大学大気海洋研究所特任研究員

カツオ一本釣漁（以下、カツオ漁）は黒潮沿岸地域で広く見られる漁法のひとつである。日本における黒潮の「玄関口」は沖繩だが、カツオ漁は、

一九〇一年に鹿児島県より座間味島に伝わったことと始まり、その後、全県的に展開した。沖繩本島北西部に位置する本部町では、一九〇四年に

カツオ漁が始まり、カツオ節製造も盛んにおこなわれ、「カツオの町」として知られている。

餌の漁獲方法

カツオ漁では、漁場の選択やカツオの群れの状態などをよむ船長（漁労長の「技」も重要だが、そこに至るためには餌の獲得という大きな課題をクリアしなければならない。

本部町におけるカツオ漁船団所属のウミンチュ（漁師）は、カツオの漁獲をおこなう「ホンセン」に従事する者と、餌の漁獲をおこなう「ジャコトリ」に従事する者にわかれる。餌は「四艘張網」とよばれる敷網漁の一種によって漁獲される。この漁法ではまず夜間に集魚灯を点灯し、魚を集める。その後、四艘の船を四方に配置



四艘張網漁の様子



カツオ漁の様子（写真はすべて粟国島沖にて2006年に撮影）

うに漁場を選択する。また、集めた魚を網へと誘導する際の潮の状況も、瞬時に把握することが求められる。少しでも潮流が強いと、蟻集した魚が分散してしまう。こうして漁獲された餌は午前〇時前後にホンセンへと積み込まれ、ホンセンはカツオ漁へと向かう。

沖繩のカツオ漁史における餌問題

餌の確保は歴史的に困難を極め、社会問題とも関係してきた。沖繩では一九四八年八月に公布された「新漁業條令」で、カツオ漁に使用することを条件にキビナゴの採捕が許可された。沖繩



ホンセンへの餌の積み込み

の新聞紙上では、戦後に横行した爆薬漁による漁場荒廃に伴う餌となる魚の減少や、魚巢化した沈船の引き上げに対するカツオ漁師の反対運動なども報道された。その他

にもカツオの餌の必要性を訴える地域の声が多数取り上げられてきた。

カツオ漁は今や県内の僅かな地域でおこなわれる程度となった。こうした背景には、餌の獲得が困難になったことが大きく影響している。現在も伊良部島では、アギヤの後継者不足により、餌の確保が問題となっている。本部町では、沖繩本島で最後のカツオ一本釣漁船団であった「第十一徳用丸」が二〇一〇年一〇月に最後の操業を終えた。同船団では、晩年にかけて餌の漁獲が困難になり、カツオ漁の操業が休止されるケースが増えていった。こうしてみると、沖繩のカツオ漁の歴史とは、餌の獲得の歴史であり、その困難とともにカツオ漁は衰退したといえるだろう。

街場の釣り堀、 この小粋なるもの

木名瀬 高嗣

東京理科大学准教授

いわゆる転勤族サラリーマンの息子であったわたしは、学齢期の一九七〇年代後半から一九八〇年代に地方都市の住宅地を数年毎に転居して育ち、その土地土地の手近な水路や池、港湾へチャリンコで通って雑魚と戯れるのを常とした。大学

入学で上京し釣り以外の趣味が増えてからも、たまに思い出したように釣りをしたくなると行くのは、何故かだいたい電車で行ける近場のポイントばかりだ。湾岸でのルーアー釣りに一時期ハマリ、カップルがちらほら佇む夜の東京国際展示場の辺

りでシーバス（スズキ）を釣ったこともある。都会の「箱」街場の釣りには、大自然のなかでのそれがない独特の小粋さがある。

日本の都市で発達した小粋な釣り文化といえ
ば、釣り堀に止めを刺す。箱釣りという別称が
あるように、比較的小さな長方形の人工池の周囲
に釣り座を設けたものが古来のスタイルで、釣り
人は茶を啜り煙を燻らせながらコイやフナを釣っ
て楽しんだ。江戸時代後期にはすでに江戸の町人
の遊興として親しまれ、幕末にはプロイセンのオ
イレンブルク使節団がその様子を観察し風景画に
描写している。後代には野池などの自然を利用し
た広い釣り堀も各地にあらわれるが、東京周辺で
はこぢんまりとした箱の趣を受け継いだ形式のそ
れらが近年まであちこちにあった。

魚をたくさん放流しているのだから当然誰で
も釣れる、というほど簡単なものではなく、むし
ろ技量の差がはっきりと出るからこそ面白い。手



台湾、台中市にあるエビ釣り堀「拉爽爽
(ラーシュアンシュアン)」。大型の釣り堀
には酒や料理を楽しめる熱炒(ルーチャ
オ)やカラオケなどが併設されているこ
とも多い(2020年)



練れの客たちを相手に百戦
錬磨の魚たちはむかしも今
も繊細でクレバー、案外奥の
深い遊び相手である。

短時間で行ける場所で気
安く楽しめ、あわただしい都
会の生活にマッチした釣り堀
は、お隣の台湾でも庶民に人
気のレジャーである。タイ原
産オニテナガエビの養殖業から一九八〇年代に生
まれたエビ釣り(釣蝦)は、現在でも台湾の釣り
文化のなかで大きな比重を占める。貸し竿があ
るので手ぶらで行くことができるが、慣れてくる
と道具立てや釣技に凝り出すところは日本の釣
り堀と同じだ。現地の釣具店には硬軟さまざま
な調子の竿や仕掛け、エサ、さらには竿掛けや道
具箱などバラエティに富んだ専用タックルがとこ
ろ狭しと並んでおり、このあたりの奥義の細やか
さは日本のヘラブナ釣りとよく似ている。おもに
夜の娯楽であるという点だけは、宵っ張りの多い
この島ならではの。釣れたエビはその場でこんがり
と焼き上げて台湾ビールとともに流し込む。



旗の台つりぼり店(2019年)

「旗の台つりぼり店」。男湯女湯それぞ
れの洗い場に生け簀を設けて大小の二
シキゴイを放ち、銭湯絵などのレトロ口
な雰囲気をもつまま活かすことで実
現した、まったく新しい「むかし風」
の釣り堀だ。コンディショニング管理がよ
いこともあり、魚たちは程よく釣れて
程よく難しいという絶妙な頃合いで
適当に客を楽しませてくれる。それ

でも女湯にいる大物は身持ちが堅くなかなか手
強い。そして釣りに飽きたら、脱衣場でもんじゃ
焼きや焼肉をつつきながら一杯。このへんのユル
い雰囲気がついに心憎い。宮造り様式の銭湯建築
を含め、東京らしい下町風情が残る土地ゆえに成
立する愉快な資源活用といえるだろう。

少年時代のわたしの手を慰めた釣り場は、埋
め立てや暗渠化で大方その姿を消した。むかし
ながらの街の釣り堀もまた、より手軽で速度感の
ある娯楽が増えた今ではスローで時代遅れ、何よ
り儲からないビジネスモデルとなり、東京では
めっきりその数を減らしている。

そんなわけで、街場でできる釣りなどというの
は以前にも増して贅沢な楽しみとなった。これを
書きながら、子どものころに本で読み夢想してい
たパリ市街地のセーヌ川での雑魚釣りをまだ試み
ていないことに思い至った。次にバステューユヘ
オペラを観に行くときには、スーツケースにパッ
クロッドを忍ばせて行こう。

溪流の魚と人

魚の不可思議な能力

御嶽山から飛騨にむかってほとぼしり出る秋の
谷川で、釣り人たちがイワナの思わぬ大漁に首を
かしげつつ喜んでいた。数日もそんな日が続いた
ある午、山は突然噴火した。



釣り人なら溪相を見てすぐ、エサをどこからどう流すかを考える(2018年)

雨などで増水する前は、イワナやヤマメ(西日
本太平洋側はアマゴ)が食いだめするからよく釣
れるという。山の魚のそんな不可思議な予知能力
を、釣り人ならずとも土地の人は知っている。だ
が、二〇一四年九月末の入れ食いが噴火の前兆だ
と気づいた人はほとんどいなかった。

飛騨にはこんな伝承もある。山椒の木の皮で
作った毒を川に流し漁る準備を村人たちがして
いたとき、見知らぬ僧があらわれて、流域の魚鱈
を根絶やしにするような殺生を戒めた。村人た
ちは僧をダンゴでもてなし体よくあしらって帰す
と、気にせず毒魚を敢行した。獲物のなかに五
尺もあるイワナがいた。その腹につまっていたダ
ンゴから、僧の正体が判明した。

じつは類話が全国にある。土地によって僧の正
体がウナギやアマゴなどかわるが、柳田国男は
ひとまとめに「魚王行乞譚」とよんだ。天候の
変化が予知できるくらいだから、ましてや年古っ
た川の主ともなれば、毒による敵の殲滅計画だっ
て予見できるだろうし、もしかしたら人にだって
化けるかもしれない。川の主、水の神に対する畏
れがこの話には込められている。

榎永真佐夫 民博超域フィールド科学研究部

神秘的な生態

「イワナは鰻と
は違って必ずし
も薄暗い淵の底
にのみはおらず、
時あつて浅瀬に
も姿を現わす
であろうが、そ
の代りには拳動
の猛烈さ、ことに老魚の眼の光の凄さを認められ
ていた」とも、柳田は書いている(「魚王行乞譚」)。
たしかに釣り人たちは「溪流の宝石」と称される
ヤマメやアマゴよりも、むしろイワナの行動に多
く神秘を感じてきた。山本素石によると、幸田露
伴など青森で「相手にふさわしく羽織袴の礼装で」
『新編溪流物語』イワナ釣りに出かけたほどだ。
この魚の行動がときに奇異に映じるのは、氷河
期の終わりに冷水を求め、本州最奥の谷々に陸
封されたために身につけた、恐るべき生命力の強
さと独特の生態のせいかもしれない。臆病なくせ
に悪食なので、釣り上げたイワナの腹を割くとへ
びを丸呑みしていたとも聞く(ダンゴは聞かない)。



25センチメートル
のアマゴがやっと
水から頭を出した。
最後まで慎重に寄
せない(2019年)

だがもつと奇怪なのは、山本素石が目丸くしたように、イワナはサケ科にして、ときに両生類かウナギのように陸を這って進むことである。そのためか、魚止めの滝よりも上流に生息していたり、ちっぽけな水たまりや細流から身もみださんばかりの大物がいることもある。

山釣りをする人の心

イワナを釣るには山を歩き、沢へと下りなくてはならない。溪石を踏み、川を渡渉したり岩を巻いたりしながら川を遡り、あるいは木に化け、あるいは岩に隠れ、風と水の流れを読んで梢をかわして竿を振る。極細の糸仕掛けを結んだり切つ

たり、という手先での仕事も繰り返しながら。だが彼らは、禁欲厭世の行者として幽邃の谷

にいるわけではない。じつは魚信を待つあいださえ、仕事、家族、借金その他、世俗の雑事に心を惑わされたりするものだ。おまけに、すごいヤツでも釣り上げた日には、いついつまでも我慢し続けるつもりでいる。湯川豊の表現を借りれば、自分の「昔」のなかに隠れ込んだイワナを、何度でも



尾びれの縁に紅が差しているアマゴの姿に、川原でうっとり見とれていた(2017年)

自分の都合でその深淵から引つ張りあげる魂胆だ。孤独な山釣り人は、真の離俗どころか、欲も罪も深いのである。

そういえば露伴も、かの太公望が政治的野心でギトギトに脂ぎった手で釣り糸を垂らしていたことを暴いている。井伏鱒二は「釣りの好きな人は案外せっかちで好色だ」なんて「濡れぎぬ」(釣魚記)だと怒ったが、いや、これも思い当たる節がある。

中国における釣りの歴史

塚田 誠之 民博 名誉教授

中国の釣りという、思い浮かぶのは「太公望」の故事である。周の西伯(文王)が渭水で釣りをしていた呂尚に出会い、祖父の太公が望んでいた賢者だと見抜いて登用した。呂尚は殷を滅ぼし

周王朝を建てるのに功があり、後に斉侯に封ぜられ姜姓を与えられた。西伯に出会った際に呂尚は真っ直ぐな針を用い、その針は水につからず、水面から上に出ていたという。



用水路で鮒釣りを楽しむ人(昆明市、2020年)

中国の釣りの歴史は相当に古い。釣り針は出土文物によると、骨製(新石器時代)に始まり、青銅製(周代)、鉄製(戦国時代)と推移した。甲骨文字の「漁」の字は、魚を釣り上げた形とする見方がある。糸は、漢代にはすでに天蚕糸が

使用され、ウキは、唐代には羽毛の芯が使われていたようである。竿は長くて弾力がある竹が用いられた。北宋時代までには「釣りの六物」、すなわち竿・糸・ウキ・錘・針・餌が必要であるとされ、現在の釣りの基本的な体裁が完成したと思われる。

賢者と釣り

内陸部が広大な中国では淡水の釣りが主流で、鯉・鮒・ソウギョ・青魚などを対象とし、食用としてきた。釣りの情景は詩文に詠まれ、絵画や版画の題材にされた。詩文としては、東晋の陶淵明、唐の王維、李白、孟浩然、南宋の陸游らのそれが有名である。絵画は、五代・北宋以降、水墨技法を用いた山水画が文人士大夫(高級官僚)によつて描かれ、釣り人も題材とされた。宮崎法子氏は、中国の山水画の意味を検討し、画中の名もなき漁師や釣り人、旅行者は、文人が理想とした仙界への隠逸願望を投影したモチーフであると、さらには隠逸と老荘思想とのつながりを指摘している(『花鳥・山水画を読み解く——中国絵画の意味』角川書店、二〇〇三年)。これにくわえて、おそらくは、政争に敗れ失脚した官僚が、政治に対する憤怒や自身の清廉高潔を隠喩として釣りに託したのであろう。「太公望」は、現在の中国では日本のように「釣りの好きな人」を意味することはないし、釣りは娯楽にすぎないが、太公望のように聖賢隠者が魚ではなく「国を釣つ

た」として評されるなど、かつては釣りという行為に政治的意味もあつたことが推測されよう。

諺と釣り

中国では釣りに関する諺や格言が多い。例えば魚の生態として、朝晩に浅瀬に来て餌を求め習性があり、また地域によって釣り餌が変わること、鯉や鮒などは季節に応じて釣り場を選ぶこと、鯉や鮒などは季節に応じて釣り場を選ぶこと、ねばならないことなどがある。また、釣りの心構えとして精神を集中させるべきこと、効用として「読書は人を知識や道理に明るくさせ、魚釣りは人を健康長寿にする」こともあげられる。さらに人の行動の比喩として、例えば、「良い餌を惜しめば魚は釣れない」「貪欲な魚は針にかかりやすい」のはいうまでもない。「水至つて清ければ則ち魚無く、人至つて察なれば則ち徒無し」という格言があるが、水が澄みすぎていると魚は近寄り、潔白すぎて大事小事を問わず細部にまでこだわりすぎれば他人はついていけない、すなわち他人に厳しい要求をせずに寛容であるべきだという意味になる。くわえて、太公望の故事は、「願う者(故事では西伯)が針にかかった」ことから、人に迫られることなく自ら主体的に何かをおこなうことを示す諺となつた。

このように中国の釣りは歴史の長さとともに興行きにも深いものがある。なお本稿は、呉鎮・王長工編『中国釣魚大観』(上海文化出版社、一九九二年)も部分的に参考とした。



馬遠(伝)作『寒江独釣図』13世紀 東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives
竿の根元に現在のタイコ・リールのような道具が見える。リールの発明によって深水区での釣りが可能になった

〇〇してみました世界のフィールド

メキシコから広がる音楽と宴

増田 耕平
音楽家



ソン・ハローチョを演奏してみました
東京大学で演奏するカンバラチェ。最後はわたしも演奏に混ざった
(筆者は中央、撮影：可児和希、2019年)

昨年10月、みんなの研究公演でも演奏された、メキシコの伝統音楽ソン・ハローチョ。今号では、メキシコからアメリカへ、そして日本へと国境を越えながら親しまれているソン・ハローチョの魅力を紹介する。

メキシコ
ベラクルス州

ソン・ハローチョという音楽

二〇一四年六月、わたしは夜明け前のベラクルス港のバスターミナルに着いた。外に出ると港町らしい潮を帯びた湿気が鼻を、そして皮膚という皮膚を刺激した。その感触を味わいきる前に初老の男性がわたしに声をかけた。ヒルベルト・グティエレスシルバ、ソン・ハローチョの第一人者である。

ソン・ハローチョとは、スペイン人到来以降の文化の混雑こんさつによって形成されてきた、メキシコのベラクルス州の伝統音楽である。二〇世紀前半に衰退の兆しを見せるも、ヒルベルトらの尽力により、今でもベラクルスの農村部を中心として演奏されている。わたしはそんなソン・ハローチョのさまざまなかたちを、ヒルベルトとの出会いを出发点として知ることができた。



ベラクルス州サンティアゴトゥクストゥラで開催されたファンダンゴ
(撮影：韓智仁、2018年)

ここでは、大勢の老若男女が演奏し、踊り、歌ってひとつの音楽を形成する。経験豊富な音楽家たちに話を聞くと、みなファンダンゴの大切さを語りだす。子どもたちは（そしてわたしも）浮き浮きしながらファンダンゴに足を運ぶ。宴とおして伝統を学び、伝えていくのである。

海を渡り日本へ

二〇一九年一〇月、イーストロサンゼルスでソン・ハローチョ普及活動を展開してきたバンド、カンバラチェ（スペイン語で物々交換の意）が日本にやってきた。みんなの企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」開催に伴い、みんなと東京大学にて演奏するためである。わたしは、みんなくでは聴衆の一人として、東京大学では運営側として参加した。いずれも単なるコンサートに留まらず、トークや質疑応答などを交えて、メキシコと米国におけるソン・ハローチョの背景を聴衆に伝えることができていたと思う。

ところでわたしは、ロス・ラギートスというグループを結成し、日本でソン・ハローチョの普及活動をおこなっている。同じく国境を越えた活動を展開しているカンバラチェとは、今回の来日を通じて意気投合した。

東京での公演後、彼らはわたしたちのグループには楽器を、そして招聘しょうへいに尽力されたみんなの鈴木紀さんすずききには帽子を残していった。日本での体験に対する、彼らなりの物々交換であるという。そして日本においてもソン・ハローチョへの参加者を増やし、音楽の宴であるファンダンゴを開催しようという夢が共有されたのであった。

前述のように、メキシコ系移民が多く住む米国では、この目標はすでに現実化されているといえる。果たして、ここ日本でも、ソン・ハローチョとファンダンゴは人種や文化の壁を越えていくのだろうか。

国境を越えてロサンゼルスへ

今、ファンダンゴに代表される、参加者が分け隔てなく一体となるソン・ハローチョの特徴を活かした文化的活動が広がっている。ベラクルスはもちろん、首都メキシコシティや、国境を越えた国々までも展開されている。そのなかでも、本稿ではわたしが二〇一九年三月に訪れた、ロサンゼルスのお話をしたい。

ダウンタウンからロサンゼルス川を渡った先に広がるイーストロサンゼルスは、人口のほとんどがヒスパニックである。わたしはメキシコシティからロサンゼルスに向かった。「いい家がたくさんあるじゃないか」と思ったものだが、ロサンゼルス基準では、見るからに貧困層の家が並んでいるのだという。

そんなイーストロサンゼルスでは、メキシコにルーツをもつ者としてのアイデンティティの形成や青少年の健全な教育といった目的で、市民による文化活動が展開されている。そのひとつがソン・ハローチョなのである。



イーストロサンゼルスの街並み (2019年)

例えば、イーストサイド・カフェは市民によって運営されている文化施設である。ここでは、毎週ソン・ハローチョのワークショップが開催され、地域住民らとともに音楽を学びにやってくる。集まってくる人たちの出身地や世代はばらばらであるが、ソン・ハローチョを中心とした一體的な空間と時間を共有している。



イーストサイド・カフェでソン・ハローチョを学ぶ地域住民 (2019年)

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

梅棹忠夫生誕100年記念企画展
「知的生産のフロンティア」

みんなく初代館長を務めた梅棹忠夫が残したアーカイブズ資料とデジタル・データベースをとおして、フィールドワークから著作への「知的生産」をくわしく紹介します。



フィールドノートから内容別に転記したローマ字カード (写真撮影 尼川匡志)

みんなくクラウドファンディング報告
「世界とつながる——トーマスボールをカナダ先住民のアーティストと造ろう」

みんなくクラウドファンディング「世界とつながる——トーマスボールをカナダ先住民のアーティストと造ろう」により、温かいご支援を賜りましたトーマスボール制作プロジェクトですが、カナダで制作されたトーマスボールが、4月10日、みんなくに到着いたしました。大型トレーラーで運ばれたのち、大型クレーンによる搬入作業が行われました。

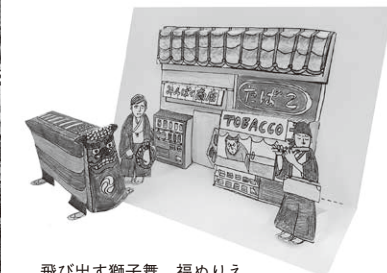


搬入作業の様子

「おうちでみんなく」のご案内

現在、ご自宅、お手元でみんなくに触れていただくための「おうちでみんなく」のサイトを公開しております。「バーチャルミュージアム」「ぬりえ5種類」、「飛び出す獅子舞 福ぬりえ」「ペーパービーズ」、「読んでみよう」のコンテンツをまとめております。再開しましたら、是非実際の資料を見に足をはこんでいただければと思います。

<https://www.minpaku.ac.jp/museum/news/ouchi>



飛び出す獅子舞 福ぬりえ
バーチャルミュージアム



彫像「つむじ風の精霊」
(マレーシア オラン・アスリ)

特別展
「先住民の宝」

世界には、「先住民」と呼ばれる人たちがいます。先住民とはだれか? 「宝」にこめられた思いとは何なのか? 本展覧会では、日本のアイヌをはじめ、北欧、カナダ、オーストラリア、中南米、アフリカ、台湾、ネパール、マレーシアなど、世界各地に暮らすそれぞれの「先住民」が大切にしている「宝」を展示します。

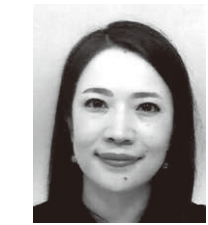
【開幕を延期します】
巡回展
「特別展 驚異と怪異
——モンスターたちは告げる——」

会期 未定
会場 兵庫県立歴史博物館
休館日 月曜日
主催 兵庫県立歴史博物館 神戸新聞社
国立民族学博物館 千里文化財団
兵庫県 兵庫県教育委員会
NHK神戸放送局
サンテレビジョン ラジオ関西
協力 山陽電気鉄道株式会社
神姫バス株式会社
特別協力 ライデン国立民族学博物館

※各イベントについてくわしくは、みんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせ受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。



研究部新メンバー
岡田恵美准教授(人類基礎理論研究部)



東京藝術大学大学院で博士号を取得後、琉球大学教育学部を経て現職。専門分野は音楽民族学。インドの鍵盤楽器文化や楽器産業、また近年はインド北東部少数民族のポリフォニーの歌唱文化を研究。

島村一平准教授(超域フィールド科学研究部)



総合研究大学院大学を単位取得退学後、滋賀県立大学を経て現職。後に博士号(文学・総合研究大学院大学)取得。専門は文化人類学・モンゴル地域研究。主にシャーマニズム、チンギス・ハーン表象、ポピュラー音楽、チベット・モンゴル仏教実践などを研究。

末森薫助教(人類基礎理論研究部)



筑波大学大学院で博士号を取得。東京文化財研究所客員研究員、国際協力機構大工部ト博物館保存修復センタープロジェクト専門家、関西大学国際文化財文化研究センターPD、民博機関研究員を経て現職。博物館資料の保存・管理に関する実証的研究、中国の石窟寺院を対象とした研究に携わる。

諸昭喜助教(学術資源研究開発センター)



奈良女子大学大学院で博士号を取得後、みんなくの外来研究員として研究に従事。専門は医療人類学。韓国の「産後風」という病いを事例として、バイオメディカルなパラダイムの中で伝統医学の病い、病いの文化的な構築などについて研究。

末森薫著
『敦煌莫高窟と千仏図
——規則性がつくる宗教空間』

法蔵館 12,000円(税別)

古代シルクロードを代表する敦煌莫高窟。数多の洞窟は、小さな仏を並べた「千仏」で彩られている。一見単調な千仏図は、壁面を満たす装飾とも捉えられてきたが、その規則性が示す視覚的特徴は、宗教空間をつくる上で欠かせないものであった。収録する多くの図版を頼りに、千仏図がつくる古代仏教世界を感じてもらいたい。



古川不可知著
『「シェルパ」と道の人類学』

亜紀書房 3,200円(税別)

ネパール東部のソルクンプ郡は、エベレストを眼前に望む山岳観光の名所である。本書では、この地域に住むシェルパの人々の暮らしと観光化によるその変容を、住み込み調査に基づいて描き出す。そのうえで、険しい高山の環境下において歩くとはどのような実践か、「道がある」とはいかなる事態かを考察してゆく。



刊行物紹介

齋藤晃編
『宣教と適応
——グローバル・ミッションの近世』

名古屋大学出版会 6,800円(税別)

大航海時代から啓蒙時代にかけて、アジアやアメリカに派遣されたイエズス会士らは、現地社会に適応することで布教を試みる。だが、それは今日なお解決しえない難問の蓋を開けることだった。本書は異文化適応を軸にキリスト教の世界宣教の全体像に迫るものである。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomoto@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)
※会員無料(会員証提示)、一般500円
第498回 7月4日(土)13時30分～14時40分
植物と人の関わり

タケ科植物、ヤシ科植物の道具利用を中心に
講師 上羽陽子(本館 准教授)
人類は植物を利用して、シエルター、狩猟具、運搬具、結束具などをどのように作りだしてきたのでしょうか。本講演では、インド北東部アッサム地域とインドネシア、ティモール島西部のタケ科植物とヤシ科植物の採取・加工・利用の事例から、道具資源としての植物利用について紹介します。現在の民族誌調査から、人類がどのようなものづくりをしてきたか、植物利用の実態に迫ります。
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

動画を配信します! 「5月上旬公開予定」

研究者のお話しを配信します。臨時休館期間も友の会をお楽しみください。初回は久保正敏先生のお話です。
「イギリスとオーストラリアをつなぐ風」
話者 久保正敏(本館 名誉教授、千里文化財団専務理事)
イギリスはなぜ、遠く離れたオーストラリアに植民することができたのでしょうか。そのヒントは「地球大気の大循環」にあります。
<https://www.senri-f.or.jp/tomomovie000/>



新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ、左記友の会講演会は、予定しておりました日程での実施を見合わせることにいたしました。延期する場合は確定次第ご案内いたします。

■5月9日(土)
梅棹忠夫生誕100年記念対談
「知的生産のフロンティアの原点」
——探検家 梅棹忠夫を語る——
■6月6日(土)
「アヌコロアイヌイコロマケル」
——国立博物館の挑戦——

世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

鶇の運搬籠

卯田宗平 民博人類文明誌研究部

わたしたちの生活になくはならない籠。安くて便利な素材の籠がありふれるなかで、中国や日本で見られる鶇飼の現場では、今も竹製の籠が愛用されている。その理由をひもとくと、現代の大量消費社会とは異なるもうひとつの姿が浮かび上がってくる。

わたしたちにとって籠は身近な存在である。スーパーに入ると手にとる籠、状態を問わずになんでも受け入れてくれる洗濯籠、「はやく魚を入れてくれ」と言いそうなわたしの魚籠。

わたしたちの祖先は狩猟採集の時代に生活の必要性から籠を作った。そして現在、わたしたちは籠なき世界を想像できないほどさまざまな籠を使用している。汎用性が高くて丈夫な籠を安価で入手できるようにもなった。こうした時代においても、特異な用途でのみ利用される籠がある。鶇の運搬籠もそのひとつである。この籠は、鶇飼の鶇(カワウやウミウ)をもち運ぶために使用される。

カワウの運搬籠

鶇飼は肉食性の鳥類を利用して魚を捕る漁法である。現在、鶇飼は中国と日本で見ることができ、中国の鶇飼では漁師たちが自宅で繁殖させたカワウが利用される。漁師のなかには自ら育てたカワ



家の軒先で運搬籠を手際よく編む古老(山東省済寧市、2007年)

ほかに代替できる籠が村の商店に売っていないからである。くわえて、村には籠作りの技術をもつ古老が多くおり、丈夫で安価な籠を容易に入手できるからだ。

ウミウの運搬籠

日本では、現在、長良川や木曾川、筑後川など一〇カ所以上で鶇飼が続けられている。日本各地の鶇飼では、茨城県日立市十王町で捕獲されたウミウが利用されている。各地の鶇匠たちは十王町から送られてきたウミウを自宅などで飼いに慣らしている。このとき十王町からウミウを運ぶのに運搬籠が使用される。

運搬籠は、十王町の鶇捕り師たちが捕獲作業のあいまに作るものである。籠はマダケを利用し、

ウをほかの漁師に販売するものもある。カワウを繁殖させる漁師は中国沿岸部の山東省や江蘇省に多いが、彼らは内陸部の湖南省や江西省、四川省までカワウを売り歩く。このとき運搬籠が使用される。

運搬籠は漁師自身が編んだものもあれば、村の古老から購入したものもある。カワウの繁殖作業がおこなわれる三月から五月に村々を歩くと、家の軒先で運搬籠を手際よく編む古老の姿をよく見られる。運搬籠はマダケやモウソウチクで作られ、なかには稲わらが敷き詰めてある。稲わらを敷くのは、なかにいるカワウの腹にタケのささくれが刺さらないようにするためである。カワウを売り歩く漁師は、ひとつの籠に二五日齢前後で巣立ち前の幼鳥を一〇羽ほど入れ、それをふたつ担いで各地をまわる。

彼らが今でも竹製の籠を使い続けるのには理由がある。それは、プラスチック製のものも含め、

六つ目編みで仕上げたものである。籠作りでは、まず長さ一八〇センチメートルほどのヒゴを準備し、籠の底部を六つ目に編み込む。そのあと、籠の腰部を立ちあげ、胴部の周囲に別のヒゴをまわして編む。最後に、菰を胴部に巻いて完成させる。ひとつの籠を作るのに計五〇本のヒゴのほか、菰やわら縄、ロープが使用される。実際に籠を利用するときは、下半分にビニール袋を巻きつける。これは、運搬時にウミウの糞尿が籠から流れ出るのを防ぐためである。

この籠は片道の運搬でしか使用されない。それでも彼らは、タケの切りだしやヒゴ作りも含め、時間と手間をかけながら運搬籠を作る。竹製の籠を作り続ける理由はさまざまあるが、ウミウの購入者である鶇匠が運搬籠を再利用できることも重



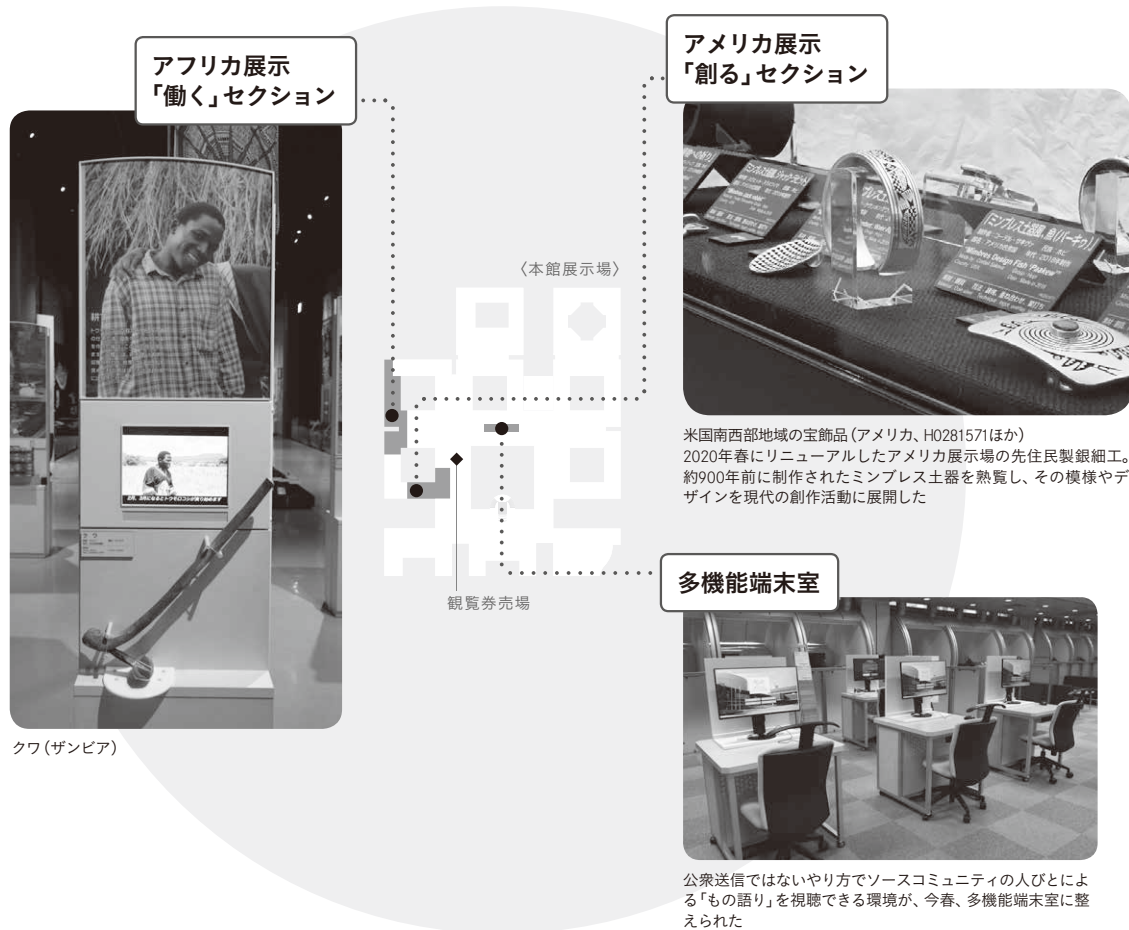
上：完成した運搬籠(茨城県日立市、2018年)
下：鶇小屋におかれて、ウミウを飼育するための籠(岐阜県岐阜市、2012年)



カワウをもち運ぶときに使用される円錐(えんすい)台のかたちをした籠(山東省済寧市、2007年)

オンライン展示の条件

民博 学術資源研究開発センター 伊藤 敦規 いとう あつのり



アメリカ展示
「創る」セクション



米国南西部地域の宝飾品(アメリカ、H0281571ほか)
2020年春にリニューアルしたアメリカ展示場の先住民製銀細工。
約900年前に制作されたミンプレス土器を熟覧し、その模様やデザインを現代の創作活動に展開した

多機能端末室



公衆送信ではないやり方でソースコミュニティの人びとによる「もの語り」を視聴できる環境が、今春、多機能端末室に整えられた

アフリカ展示
「働く」セクション



クワ(ザンビア)

の画像なので、平均すれば合計約一四五万枚が公開済みということになる。

オンライン公開と著作権

ただし、各機関の公開状況は一定ではない。あえて低解像度やサムネイルサイズで提供する場合もあるし、館内公開に留める機関や、職員以外に公開しない機関も少なくない。デジタル化イコール高解像度の館外公開、と一律にいかないのは、著作権という国際ルールの影響が大きい。例えば日本では、作りの知名度や出自、作品の形態や金銭的価値によらず、「思想または感情を創作的に表現した文芸、学術、美術または音楽の範囲に属するもの」が著作物とされる。著作権に関する国際ルールを定めた「ベルヌ条約」「万国著作権条約」「WIPO著作権条約」に従えば、条約締結国の国民が制作した著作物には「内国民待遇の原則」が適用されるため、著作権の保護期間内なら、二次的著作物の公衆送信は保護対象となる。すなわち、著作物の画像をオンライン公開する際には、制作者が日本国民でない国外著作物であっても、著作権の保護期間が終了してパブリック・ドメイン状態になった場合を除き、原著物の制作者や著作権者から利用許諾を得る必要が生じる。民博の収蔵資料の大半は日用品で、それを製作するための道具や工業製品も少なくない。しかし、ある民族集団に属する制作者個人の

思想や感情が表現されている代替不可能な著作物も多分に含まれる。制作者から直接購入した場合は口頭で許諾を得たのかもしれないが、そのことを示す文書記録の存在を確認することはほぼできなかった。著作権を専門とする複数の弁護士によれば、収蔵資料の高解像画像を著作権者の許諾を得ずに公衆送信することは、たとえ大学共同利用機関法人が非営利の研究目的でおこなったとしても、違法とみなされる可能性が非常に高いそうだ。コンプライアンスの遵守や社会的信用といった観点から、そうした運用は相当なりスクを抱えるものだと指摘された。

「再会」が生み出す「もの語り」

こうした状況に鑑み、筆者は米国南西部先住民製とされる資料の作者やその遺族を探し、利用許諾を取得する試みを始めた。新規収集の際にも著作権者の意思を書面に残り、収蔵機関としての継承に努めている。それが叶わない場合は表示サイズを小さくする、公衆送信の対象から外して公開範囲を館内に狭める、パスワード入力必須とする限定公開に切り替える、といった対応を選択的におこなっている。振り返ってみると、国外の著作権者との「再会」は単なる事務手続きに留まらず、資料に関するさまざまなストーリーを再収集するまたとない機会にもなっている。そのひとつ

二〇二〇年二月、米国スミソニアン協会は収蔵資料の高解像画像(二次元データ)および三次元データを無償配信する「スミソニアン・オープンアクセス」を公開した。収録画像数は約二八〇万枚におよび、今後数カ月でさらに二〇万枚を追加するらしい。目標は、収蔵総数一億五五〇〇万点の資料のデジタル化とオンライン共有である。

二〇〇〇年代後半以降、大英博物館、メトロポリタン美術館、オランダ国立民族学博物館、東京国立博物館といった研究機関を兼ねた文化施設も、民族誌資料などのデジタル画像の公開を始めた。「ヨーロッパ」や「ジャバサンチ」のような複数機関を横断検索する仕組みにも一部は反映されている。推進の背景は、貴重な資料の記録と次世代への継承の観点に基づくデジタル化への期待、情報通信機器の個人所有化の拡大やインターネット環境の整備、ミュージアムの訪問が困難な人びとに対する利用機会の創出などで、それらが相互に関連しているのだろう。

では、民博での収蔵資料のデジタル化と公開状況はどうか。法人化した二〇〇四年から現在までの一六年間、つまり創設以来三分の一の年月をオープンアクセス事業の運用に費やしてきた。二〇二〇年三月現在、約三万点あるモノ資料の八割(約二九万点)が、「標本資料目録データベース」でオンライン公開されている。一点あたり一枚から一〇枚程度

の成果が、資料の制作者の氏名や彼らが名付けた題目を、展示資料のキャプションに表示できたことである。また、民博に招聘したソースコミュニティの人びとによる収蔵資料一点の「もの語り」映像を、今春から本館展示場二階の多機能端末室で視聴できる環境を整えた。そこでは映像記録や高解像画像といった膨大な情報が、公衆送信を伴わないやり方で配信される。



民博3階スタジオで、ファンダ・ロマイエスティフ作の「手首当て」(H0268577)について語るホビのジェロ・ロマベンティマさん

標題を自ら付すことや、「もの語り」は、アフリカ展示場の「働く」セクションに設置された使用者本人による道具の解説映像とある意味共通する。両者は個人の記憶と経験に基づく自文化の語りを収録したもので、文化的他者による資料分類や解説という代弁とは趣を異にするからである。資料のデジタル化とオンライン公開のための著作権処理や自文化の語りのための配慮は、収集以来途切れがちな流を促進するきっかけとなる。著作権をめぐる民族学博物館ならではの取り組みだろう。



グローバル経済と闘う女性たち

南出 和余
（ななで かずよ）

神戸女学院大学准教授

二〇二〇年三月に開催された第一五回大阪アジア映画祭で上映された本作は、 Bangladesh の女性監督ルバイヤット・ホセイン（一九八〇〜）の脚本・監督によって、アパレル生産工場で働く女性たちの闘いを描いている。



「メイド・イン・Bangladesh」のワンシーン（提供：ルバイヤット・ホセイン）

映画の舞台は世界の大手アパレル工場が立ち並ぶ Bangladesh 首都ダッカ。二三歳の主人公シムは縫製工場に働いている。過酷な労働状況、安全性を欠く工場設備、低賃金なうえにきちんと支払われない給与、それでも他に就ける仕事がなく葛藤しながらも働き続けなければならぬ毎日のなかで、シムは労働組合の立ち上げを決意する。経営者からの脅しや家族の反対にもめげず、同僚たち

の署名を集め、労務省に掛け合い奮闘する。衣装や言葉遣いに示される格差、それを互いに感じつつも階層を超えて助け合う女性たち、埃まみれのダッカの街と電力不足で暗い部屋に「際映える色鮮やかな彼女たちの衣装が、Bangladesh のリアリティを示す。

女性たちの抵抗

映画に出てくる女性たちは、Bangladesh の急速な経済成長を支える主要労働力であるだけでなく、世界のアパレル産業を担っている。現在 Bangladesh は中国に次ぐ世界第二位の輸外型既製服生産国で、ファストファッションをはじめ世界の主要アパレルブランドが彼女たちの「豊富で安価な労働力」に頼っている。映画のワンシーンに、シムが一日に縫うTシャツは一六五〇枚、そのTシャツが海外の店頭と並ぶとき、わずか二、三枚の値段が彼女の月収に相当するという印象的な会話がある。この不均衡な経済システムのもとでの搾取は、日本で暮らすわたしたちにも無縁ではない。「Made in Bangladesh」は、今わたしたちが日々纏う衣類に刻まれており、彼女たちの闘いの矛先は、わたしたちにも向けられている。

しかし映画は彼女たちを決して「無力な犠牲者」には描いていない。状況を憂えながらも強い感情と思いを

「メイド・イン・Bangladesh」

原題：Made in Bangladesh

2019年 / Bangladesh・France・Denmark・Portugal / Bengali / 95分

監督：ルバイヤット・ホセイン

出演：リキタ・シム、ノベラ・ラフマン、バルビン・バル、ディバナタ・マーティンほか



ダッカの縫製工場で行っている作業をする女性たち（2012年）

やりによって団結し、抵抗する姿は圧倒的で頼もしい。ルバイヤット監督は、この映画は「女性の抵抗」を描くと同時に、ムスリム女性に対する犠牲者というステレオタイプを壊すものであるという。事実、この映画の舞台となった二〇一三年を節目に、Bangladesh のアパレル産業は、彼女たちの抵抗と行動によって大きく変化している。

「ラナ・プラザ崩落事故」のその後

映画は実在する人物ダリヤ・アクター・ドリ氏の実話に基づいている。冒頭で述べた大阪アジア映画祭で、映画祭と神戸女学院大学文学部英文学科との共催によるシンポジウム『メイド・イン・Bangladesh』を考へる」を開催し、ダリヤ氏とのトークセッションをおこなった。ダリヤ氏が組合を立ち上げるべく奮闘したのは二〇一三年二月から四月のことである。この二カ月の闘いのあいだの四月二四日に、ダッカでは「ラナ・プラザ崩落事故」が起きた。縫製工場がひしめきあうビルの崩壊によって、二二〇人以上の労働者が死亡、約二五〇〇人が負傷した。ラナ・プラザ崩落事故は世界のアパレル産業の大惨事として問題を露呈するとともに、彼女たちの労働運動を活発化させた。以降、発注する側の多国籍企業は、工場の施工条件や最低賃金の確保などコンプライアンスを強化した。



ダッカの一角にある複数の縫製工場が入るビル（2018年）

しかしこのことで、工場に働く女性たちの状況が改善された訳ではない。映画の主人公シム、実在のダリヤ氏が働いていた工場は、施工条件を満たせず数年後には閉鎖に追いやられ、彼女を含む多くの労働者は仕事を失った。彼女は労働者の代表として工場経営者とともに、改善のための猶予期間や労働確保を多国籍企業に懇願したが応じてもらえなかった。組合活動をやっていた彼女たちは他の工場でもなかなか雇ってもらえない。そして現在、世界のアパレル産業は、労働環境が改善されつつある Bangladesh からヨルダンなど他国へと工場を移転しつつある。しかしそこで働くのは、ダッカで仕事を失い、海外出稼ぎ労働者として Bangladesh からきた女性たちである。異国の地で働く彼女たちは、ダッカで働いていたときのような労働組合からのサポートも得られないまま、さらに過酷な労働状況を強いられるという。

この世界のアパレル産業の歴史的負の連鎖はいつまで続くのだろうか。グローバル経済の先端にいる消費者のわたしたちが、そろそろ立ち上がるときを迎えているのかもしれない。

ことばの迷い道

「わたしこそ、ありがとう」

おかもと まり
岡本 真理

大阪大学教授

新しい外国語を学び、そのことばを上手に話せるようになりたい、と強く思ったとき、みなさんならどのような勉強の工夫をするだろうか？ 現地の友人を作って会話をし、映画やドラマを、^{せりふ}台詞を暗記するまで繰り返し見る、などがあるだろうか。わたしはハンガリー語というちよつとめずらしい言語に大学生のころに出会い、結局それを研究・教育することを職業としてこれまでやってきた。今振り返って、ハンガリー語会話をどのように身に着けたのか考えてみると、留学時代の知人友人との交流はもちろんだが、それより強烈な記憶は「ケンカ」なのである。

タクシートの運転手と、レストランではウェイターと、郵便局や旅行社、駅の切符売り場の係員と、列車に乗れば切符をめぐって検札員と、さらに査証をめぐって国境警備員と……など、これまでいろいろな場で口論になることがあった。タクシートの改造メーターの料金が見る上がり続ければ、「ちよつとこのメーターおかしいよ。前に乗ったときはこんな高くなかった。なんで赤信号でこんなに上がるの」と文句を言わないといけないし、頼んでもいないサラダが運ばれ、その料金を請求されたりすると、「これは頼んだ覚えがない」と主張しなくてはならない。すると、「おかしいなあ」ととぼけた運転手はメーターをバン！と叩き、その衝撃で表示はゼロにリセットされ、目的地に着いたころにはちよつとよい料金となるのだ。食べてしまったサラダのことを「セットだと思ったから食べたんだ」「セットなんてありません、払ってく

ださい」とウェイターとエンドレスの言い合いになったときは、横で見ていた家族が「もういいじゃない、食べちゃったんだから払っても」とさすがにあきれ顔になった。わたしは元来どちらかというとぼーっとしたのんびり屋だったが、ハンガリー留学を境に、やや攻撃型の人間に生まれ変わったかもしれない。ただ、当時まだ社会主義国から体制転換を果たしたばかりの混乱した社会で、覚えたてのハンガリー語で全身全霊を傾けて自己主張し、ときに勝利をつかみとり、ときに涙をのむことで、わたしのハンガリー語会話が格段に向上したことは間違いない。

「お・も・て・な・し」が自慢のどこかの国とは違い、一九八九年まで社会主義国であったハンガリーは、お世辞にもサービスが行き届いた社会とはいえない。スーパーのレジ係の「商品売ってやる」という態度、客の「ありがたく買わせていただく」という態度は、残念ながら一朝一夕には改善しない。レジの会計が終わると、まず客が「ありがとう」と言い、これに答えて店員が「わたしこそ、ありがとう」と言うのが一般的である。しかし、これに慣れてしまうと、日本のスーパーで店員ばかりが一方的で過度に丁寧なサービスを提供し、客はそれを当然のことのように無反応な態度でスルーする光景が、逆に異様に思えてくる。客も店員も同じ人間だ。店員の「わたしこそ、ありがとう」のことばに、かえって平等な人権をもつ者同士の、互いを尊重し合う響きを感じるようになってきたこのころである。

編集後記

本号の特集「釣り」は、釣り道具をとりあげてほしいという読者からのお便りに端を発する。釣りは旧石器時代から続いてきた営みだけに、釣りばりの起源や神話から生業、遊興、文学、故事にいたるまで、また場所も元銭湯から溪流、大海原までと幅広い充実した論稿がそろった。思えば現代人にとって、釣りほどヒトが自然に能動的に働きかけ、その結果が即時に、かつ直にわかる活動はないのではないか。

沖縄の粟国島^{あぐにじま きんごしろう}の珊瑚礁の端で釣りをしている印象的な光景を目にしたことがある。ヤマトンチュの小学4年の男児が、魚信を感じた途端にもっていた釣り竿を放り投げ、テグスを両手で手繰りはじめたのだ。リールを巻くことなど頭から吹っ飛び、逃がしてなるものかと必死だったのだろう。釣りの本質はこの男児の反応に凝縮される。細いテグスを介して見えない魚のプルプルという生を感じる興奮と、それを獲りたいという欲望だ。釣りには動物としてのヒトがもつ根源的なエクスタシーが伴うようだ。だとすれば、釣りと一体の営みのはずだった、釣った魚をさばいて味わうことも大切だろう。粟国島での男児は、釣り上げた魚をちゃんと食べていた。(南真木人)

●表紙: アニメ「NieA_7 (ニアアンダーセブン)」のモデルとなった銭湯「荏(え)の花温泉」を改装した「旗の台つりぼり店」(東京都品川区、6頁参照)
(撮影: 木名瀬高嗣、2019年)

次号の予告

特集

「食と博物館展示」(仮)

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



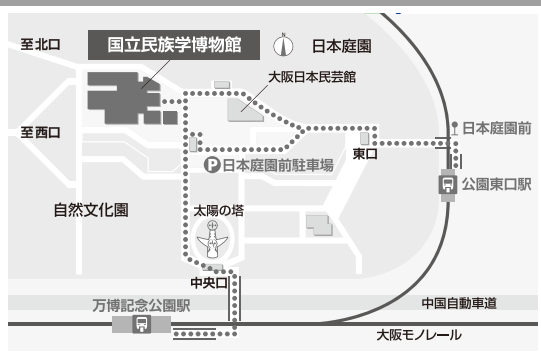
月刊みんぱく 2020年5月号

第44巻第5号通巻第512号 2020年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 南真木人(編集長) 上羽陽子 齋藤晃
菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾
デザイン 宮谷一欒 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 遊文舎

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りにください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

